

令和7年度卒業式 学長式辞

卒業生、修了生のみなさん、あなたがたは本学の各学部・大学院研究科が定める学位授与の方針を踏まえた厳格な審査を経て、今日、ここに学士、修士または博士の学位を授与されました。ここに至るまでの着実な研鑽に敬意を表しますとともに、学校法人津曲学園、鹿児島国際大学、鹿児島国際大学大学院の教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、卒業の日まで、みなさんを支え励ましてこられたご家族、ご親族のみなさまもさぞやお喜びのことでしょう。本当におめでとうございます。

さて、先月から今月にかけて、イタリアの複数の都市を会場にオリンピック・パラリンピック冬季大会が開催されました。フィギュアスケートの「りくりゅうペア」（三浦璃来選手と木原龍一選手）をはじめとする選手たちの素晴らしい活躍を実況放送で見守った人も多いのではないのでしょうか。競技会場でアスリートたちが、途方もない重圧と戦いながら、長年の着実な研鑽の成果を堂々と見せてくれたとき、画面越しに見ている私たちがさえ大きな高揚感に浸ることができます。その感動は、他にたとえるものがないほどです。

もちろん、制度としての「近代オリンピック」については、その肥大化、商業化、地球環境への負荷、不明朗で不透明なガバナンスなど、未解決のさまざまな問題に目をつぶることはできません。また、SNS 上で選手たちに投げかけられる心ない非難や卑劣な暴言など、競技を見る側のモラルにも問題がないわけではありません。

しかしながら、今回の冬季大会の報道を見ながら、ふと気づいた「よい変化」がふたつありました。少し前までのオリンピック報道のありかたと比較すると、ずいぶん変わったものだな、よい方向に変わったな、と思える変化です。

ひとつめは、私が見た限りの報道では、この大会での日本代表選手のメダル獲得数を、過去の大会での獲得数との比較に基づき「長野大会と並ぶ」とか「史上最多」と報道することはあっても、他国と比較して何番目といった報道はまったく見られなかったことです。日本国民が日本代表選手の活躍に喝采するのはごく自然なこととして理解できますが、メダル獲得数で国家の威信を競うといった発想は時代遅れで、本来の「オリンピック精神」からも完全に逆行しています。かつては当たり前のように見られた、そういう切り口の報道があまり見られなくなったのは、この国の市民社会の確かな成熟を物語っており、好ましい変化だと思いました。

ふたつめは、全力を尽くして競技に臨みながらも、思うような成績をおさめることができなかった選手たちに対するあたたかい眼差しです。たとえ不本意な結果であったとしても、潔く受け入れ、今後の糧にしようとする前向きな姿勢を示した選手を積極的に評価し、そこに至るまでのプロセスと合わせて称賛する声がしばしば聞かれ、その声に大きな共感が寄せられました。

たとえば、アルペンスキーのリンゼイ・ボン (Lindsey Vonn) は、直前に開催されたワールドカップで負傷し、出場が危ぶまれましたが、緊急手術を経て女子滑降に出場。レース序盤で転倒し、再び緊急搬送されました。残念なことに「途中棄権」という結果には終わりましたが、直後に彼女が SNS で発信した力強いことばは幅広く拡散され、共感を呼びました。

「私は挑んだ。夢を見た。飛んだ。もし私の歩みから何かひとつでも学びとれることがあるとすれば、皆さんには大胆に挑む勇氣を持ってほしい。人生は短い。危険を冒してでもチャンスをつかみ取らなければ、すぐに過ぎ去ってしまいます。人生で失敗と呼べるのはひとつだけ。それは挑戦しないことなのですから (I tried. I dreamt. I jumped. I hope if you take away anything from my journey it's that you all have the courage to dare greatly. Life is too short not to take chances on yourself. Because the only failure in life is not trying)」(Lindsey Vonn [@lindseyvonn] のインスタグラム、2026年2月10日)。

勝利のことばではありません。しかし、だからこそ胸に迫ることばです。挑戦すること自体に価値があり、その歩みのなかにこそ人間の成長があるという信念が、そこには力強く示されています。

「私は挑んだ。夢を見た。飛んだ」は、今回の五輪の開催国がイタリアだったからでしょうか。ユリウス・カエサルの「来た、見た、勝った（ラテン語 Veni, vidi, vici／英語 I came, I saw, I conquered）」をもじっています。洒落ていますね。書き手の洒落気と教養の深さをあらわすだけではなく、カエサルの名言との対照によって「勝てなかった」ことへの無念を仄めかしてもいます。

五輪の大舞台での「途中棄権」は、彼女にとって、この上もなく無念だったことでしょう。しかしながら、負傷をおして、あえて出場したことへの悔いは微塵もありません。リスクを冒してでも挑戦することの尊さは、たとえ失敗という結果で終わったとしても、色褪せることはありません。「人生で唯一の失敗は挑戦しないことだけ」という結びの言葉は、決して負け惜しみではありません。むしろ、彼女にとって、この信念こそが、これまでの輝かしい活躍の原動力であったことを物語っています。これからも、この信念をもって、何度失敗しても、そのたびに立ち上がり、実績を積み重ねていくに違いありません。

みなさんの多くは、高校生活の途中からパンデミックを経験し、大学入学後も不自由で先が見えない学生生活を過ごしました。計画どおりに進まない日々の中で、不安や喪失感を味わいながらも、学びを止めることなくここまで歩んできました。コロナ下で先が見えない不安を抱えながら、幾多の喪失や挫折を経験してきたみなさんだからこそ、ボンのことばに深く共感できるのではないのでしょうか？

ところで、鹿児島国際大学の卒業生の評価として「突破力」を挙げてくださる、企業経営者の声をよく聞きます。「突破力」とは、どんな力でしょうか？ 私は、「課題の困難さに臆することなく、何度失敗しても成功するまで挑戦を続ける力」であると考えています。

今、世界では、ウクライナやイランの情勢を見てもわかるように、これまでの常識から予想もつかない事態が次々と起こっています。社会のあり方も、働き方も、生き方も、急速に変化しています。このような不安定な動乱の時代だからこそ、前例にとらわれず、新しい道を切り拓いていく勇気が求められているのです。これからの時代は、様々な場面で、先ほど申した意味での「突破力」がますます物を言う時代になっていくことでしょう。みなさんが、先輩たちのバトンを引き継ぎ、この大学で培った「突破力」を、それぞれの持ち場で発揮し活躍してくださることを信じています。

みなさんの前途には、思いどおりにいかないことや、立ち止まらざるをえない瞬間もきっとあるでしょう。しかし、そのたびに思い出してほしいのは、ボンのこととその精神です。挑戦すること自体がすでに価値ある一歩であり、挑戦を続ける人にこそ、新しい道は開かれます。鹿児島国際大学で身につけた知識、経験、そして「突破力」を武器に、それぞれの場所で大胆に挑み続けてください。

みなさん一人ひとりの挑戦の一つひとつが、社会をよりよい方向へと少しずつ前進させていくことを、私は確信しています。どうか失敗や挫折を恐れず、自分自身の可能性を信じて、力強く羽ばたいてください。

ご卒業おめでとう。どうかお元気で！

令和8年3月19日

鹿児島国際大学学長 小林 潤司